

# 地域の教育資源を活用した本校の教育活動 ～洞爺湖遊覧船ガイドを活用した学校設定科目「地域ビジネス」～ 北海道虻田高等学校 学級数3 (校長 廣川 雅之)

## I 実践テーマの趣旨

本校は、西胆振地区唯一の商業高校である。平成 25 年度入学生の教育課程から「地域のビジネスに関する知識と技能を習得し、地域社会の一員としての意義や在り方を理解させるとともに、地域に貢献しようとするビジネスの諸活動を主体的・合理的に行う能力と態度を育てる」ことを目的として学校設定科目「地域ビジネス」を設置し、準備を進めていたところ、国土交通省北海道運輸局室蘭運輸支局より「地元高校生による洞爺湖遊覧船ガイド育成が、同世代の修学旅行生の受け入れなど、地域の新たな観光資源に繋がる。」と提案を受け、運輸局、洞爺湖町、洞爺湖汽船株式会社等の関係機関との産官の連携・支援・協力を得て、平成 27 年度から洞爺湖遊覧船ガイド育成事業がはじまり、本事業は全国でも初めての取組であった。事業開始から 3 年間で一定の成果をあげたことにより、国の事業としては終了した。平成 30 年度から 2 年間は室蘭運輸支局として支援をいただいたが、所期の目的を達成したため、令和 2 年度からは洞爺湖町が主体となり洞爺湖汽船株式会社等の関係機関との連携・支援・協力で実施している。

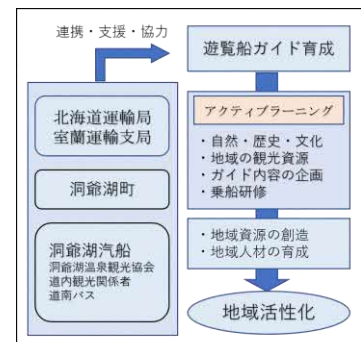
## II 実践の内容

事業開始当初は、教科「商業」の取組として行われていたが、近年では学校全体の取組として、「総合的な探究の時間」において、教科横断的に実施している。1 年生では「社会見学」として洞爺湖サミットが開かれたホテルの見学に行き、担当者からサミットの講話を聞いている。また、「西山火口見学」は火山マイスターを講師として、災害遺構や通常は立ち入りできない区域に許可を得て入り、火山活動を体感するなどの教育活動を行っている、2 年生では、「洞爺湖周辺観光ガイド研修」及び教科横断的な取組として、家庭科で地元食材を使った「ジオピザづくり」の調理実習を行っている。集大成として、3 年生では学校設定科目「地域ビジネス」をメインとして、地域の教育資源を活用して洞爺湖遊覧船ガイドを実施しており、系統立てた指導を工夫・改善している。

### 1 洞爺湖遊覧船ガイド育成事業

本事業は、①地域の自然・歴史・文化についての学び（地域理解）、②生徒による自主的なガイド内容の企画（思考・表現）、③地域への関心の喚起（主体的に学習に取り組む態度）、④コミュニケーション能力の向上を目的としている。また、洞爺湖町を訪れた観光客の人数は、外国人旅行者が支えている現状がある

ため、安定的な旅行者として確保が期待できる修学旅行生を誘致することで洞爺湖観光の新たな需要を生み出す可能性が高いと考えられることや本事業を通して体験したことを活かして国内旅行者のニーズを高める提案ができるため、本事業を行うこととした。

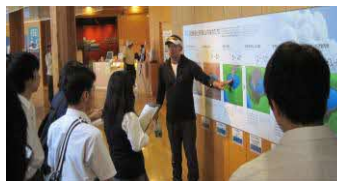


遊覧船ガイド育成事業のイメージ図

### 2 洞爺湖遊覧船ガイドの実践（令和元年度）

2 年生までの教科横断的な学習をもとに、地域の教育資源を活用して次の表の事前学習を行い、洞爺湖遊覧船ガイドプランの立案を行った。立案にあたっては、単に事前学習等で学んだ知識の伝達ではなく、高校生の視点で対話型による体験的な要素を取り入れたガイドプランとし、交流を深めることをメインに取り組んだ。

そのため、講義や研修で得た知識を活用して、グループ毎に教え合い、学び合いながらガイドプラン



事前学習	講義「洞爺湖の自然」
	講義「洞爺湖のイベント」
	講義「洞爺湖有珠山ジオパーク」
	講義「ガイド術」
	研修「有珠山ロープウェイガイド」

を企画するアクティブラーニング型学習の授業展開を行うことにより、生徒の学びがさらに深化する形となっている。

本校2年生を対象とした模擬ガイドの実施後は、直接、感想等を聞き、振り返りを行い、マネジメントサイクルPDCAを活用して、修正を図った。洞爺湖町立虻田中学校3年生を対象とした模擬ガイドでは、工夫改善がなされ、ふるさと教育で地域のことを学習していることもあるが、「新しい知識を得た。」や「興味をもつようにクイズをするなど工夫されていた。」の感想が多かった。道外からの修学旅行生へのガイド研修では、方言で興味を引くなど、対象者を考慮し、ガイド内容を変更するなど工夫改善されており、アンケートの結果からは、「高校生のガイドは楽しかった。」、「また洞爺湖に来たい。」など高い評価を得た。

町内の介護老人福祉施設の入居者へのガイド研修では、地域のことを知り尽くしている方が多く、対象者によって工夫・改善が必要であることを再認識するなど、この事業の体験的・実践的な学習を通して身に付けることが多く、「顧客満足度を上げるためにどのようなことが必要なのか。」など多くのことを学ぶことができた。

平成27年度に、道外からの修学旅行生にはじめてガイドを実施してから、平成28年度は2校、平成29年度は1校、令和元年度は1校にガイド研修を実施しており、当初の目的に加えて「ふるさと教育」の一環として、平成29年度から虻田中学校の3年生に模擬ガイドを行っており、中高連携にも繋がっている。令和3年度においては、町内の小学校からも声がかかっており、本校の取組が地域に浸透し、理解されていると感じている。

ガイド	模擬ガイド① 本校2年生
	模擬ガイド② 洞爺湖町立虻田中学校3年生
	ガイド研修① 埼玉県立秩父高等学校2年生
	ガイド研修② 町内介護老人福祉施設入居者



### III 実践の成果と課題等

本事業をはじめとした様々な活動を通じて、生徒は地域を理解し、自ら考え、表現する力を身に付け、他者とのコミュニケーションを図るようになり、成長した姿を見ることができた。成果と課題については次のとおりである。

#### 1 成果

- (1) グループ毎に教え合い、学び合うアクティブラーニング型学習を通し、生徒個々が自主的・協働的に学習を進めるようになった。
- (2) 事業開始当初は、道外からの修学旅行生を対象としていたが、模擬ガイドで、町内の中学生を対象に行うことで、ふるさと教育の一環として中高連携が図られた。
- (3) メディアによる報道等で、本校の教育活動が広く知られ、生徒募集の一助となった。

#### 2 課題

- (1) 北海道胆振東部地震及び新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、修学旅行生が減少、及び交流ができない状況にあり、令和2年度以降は模擬ガイド（中高連携）しか実施できていない。
- (2) 現在の形をどのように発展していくと教育的効果が上がるか、検討する必要がある。
- (3) 新たな観光資源を、どのように教育活動に取り入れていくか、検討する必要がある。

### IV おわりに

これまでの取組について、継続して進めながら、ブラッシュアップするとともに、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るためにも、学校と社会が課題を共有し、課題解決に向けて連携・協働しながら新しい時代に求められる資質・能力を育成する必要がある。

本校は地域をフィールドとした教育活動を実践しているが、今後は学校、家庭、地域社会の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、教育活動の改善・充実を図っていきたい。